

# 日本の東京から世界の東京： 多様性を武器とした国際都市構想へ

モハメド・オマル・アブディン

# CAPEDS とは

**スーダン障害者教育支援の会**

(Committee for Assisting and Promoting Education of the Disabled in Sudan:  
略してCAPEDS)

2007年3月に、スーダン人留学生と日本人学生によって  
結成された団体。

2008年3月にNPO法人格を取得

**【団体目標】スーダンにおける障害者が社会に参加し、教育、就労、余暇などの面で平等な生活を実現すること**

# ①基礎教育：エルヌール盲学校

＜障害の有無に関わらず、基礎教育を受けられるようにする＞



1961年に設立された、スーダン唯一の国立盲学校。

1年生から8年生まで、94名の生徒が連邦教育省の一般教育課程に準じたカリキュラムのもとで勉強しています。

私たちは、この学校で、校長先生や他のスタッフの皆さんと連携し、子どもたちの教育環境の改善に一緒に取り組んでいます。

## ②情報教育：

＜障害の有無に関わらず、情報教育を受けられるようにする＞

「支援室開講」(2008年8月)  
大学と交渉の末、支援室となる部屋を  
手配し、5台のパソコンを導入

「講習会開催」(2008年10月～)  
視覚障害学生に対して、音声読上げ  
ソフトIbsar搭載パソコンの基本的な  
使い方を説明する講習会を開催

「ソフトの購入と指導者育成」  
「メンテナンス人材確保」



## ③内発的取り組みの促進:

<国外からの支援に頼らないためのシステムをつくる>

### ハルツーム大学 障害を持つ卒業生の会



国立校ハルツーム大学を卒業した、障害を持つOBOGによる組織

現在の登録人数は50名を超え、執行部10名を中心に、障害学生支援室の管理や、障害に対する理解促進活動を行っています。

運営費は会員が払う月5ポンド(約200円)の会費によって支えられており、執行部はボランティアで運営にあたります。

## ④障害者スポーツの普及: ブラインドサッカーへの取り組み 〈障害をこえて、スポーツを楽しむ〉



2004年 ブラインドサッカーボールを  
スーダン現地へ寄贈

2005年 スーダン盲人連合スポーツ部  
へサッカーボールを寄贈

# これからは「攻めの東京」に向けてなにが必要か？

- \* **ダイバーシティ → 女性、高齢者、若者、障害者、外国人、様々な人たちが活躍**
- \* **様々な人を受け入れるというダイバーシティは大切であるが、受け身ではなく、ダイバーシティの中に飛び出す「攻めの東京」も必要**
- \* **「多様性を認めましょう」と言っているうちはまだまだ。**
- \* **多様性はチャンスなので、「認める」のではなく、自ら「求めよう」。**

# 「大都市の力」が、このままではもったいない

- \* 東京は世界有数のパワフルな都市(人口、教育、文化)
- \* 当然ながら都民の生活の向上が重要な課題でしょう。
- \* だが、東京にはそれよりももっと大きな役割があるのではないかと僕は勝手に片思いしている。  
→ この力を世界のためにも向ければすごいことになります。
- \* 内向き志向は依然としてささやかれているが、これでは、日本にも東京にも未来はない。

# 攻めの姿勢でもっと外へ

- \* アジアの国々はもっとアグレッシブ
- \* 一人ひとりが、どんどん外の世界へ飛び出していくことが大切
- \* 用意されたものではなく、生きた経験が必要
- \* → ある日本人の新聞記者が、紛争直後の南スーダンの首都ジュバの中国系ホテルで、タダで働いていた中国人に理由を尋ねると、将来の自分のビジネスに役立つ勉強をするためと答えた（日本ではこんな人想像つかない）

# 若い子には旅をさせよ

- \* 東京都では高校生や都立大生など向けの留学プログラムがある。
- \* これに加え、新たな留学プログラムを考えてはどうか？
- \* 英語がうまくなっただけで真のグローバル人材にはなれるか？
- \* これからの時代は刻々と変化する世界環境に対応できる人材が重要。
- \* そのような人材を育成する方法は？

# 国際協力ハブ構想

- \* 都、都民、企業、国際NGOなどが一緒になって、国際協力活動を広めてはどうか？
- \* 人間の幅を広げるために、発展途上国に都の若者を丁稚奉公に出してはどうか？
- \* 厳しい環境・貧困などの環境下で発展途上国の人々はどのようにして人生を切り拓いていこうとしているのかを、苦楽をともにしながらそれを感じ取る経験をさせることは大切だろう。
- \* その体験が財産となろう。

# 体験をどう生かすか？

- \* 発展途上国での体験を終えた若者には、将来的に、世界の様々な問題に目を向けるようになれば、彼らが活躍するための持ち場が必要。
- \* そこで、国際協力活動を展開している、東京都に本部を構える国際協力NGOの支援と引き換えに、若者の国際協力分野への就職を国際協力NGO側が推進。

## 東京都が国際協力のハブになるメリットは

- \* 日本のソフトパワーの向上（都市外交としてのメリット）。
- \* グローバルな問題を解決できる日本の人材を育成（ビジネスにも転用可能）。
- \* 世界の問題への理解を通して、足元の問題を客観的かつ広い視野で見つめなおすことができ、国内問題へのクリエイティブな解決策のアイデアが期待できる。

# 国際協力は「人のためならず」

- \* 外に出て、国際協力をして積んだ経験が力になる
- \* 人口減少社会のなか、世界の多様性の中で力を養ってきた人たちが、将来の東京・日本を担っていく
- \* こうした流れが定着し、文化になり、2030年、40年、50年には、「国際協力のハブ」となる、さらにパワフルな東京が実現